

# 第19回 『愛は不死鳥』の絶叫が 忘れられない昭和45年の紅白

『NHK紅白歌合戦』をご覧になりながら大晦日の夜を過ごされた歌謡ファンもおいでのことと思います。

新聞のテレビ欄に誰が何を歌うかなどが掲載されることのなかった時代、紅白でクレージーキャッツが何をどのように歌ったのか、翌朝、小学校の元旦登校の際、年始の挨拶もそこそこに級友たちと興奮しながら語り合ったものでした。

その後、私が社会人になる昭和49年頃までは、まだレコード大賞も歌謡大賞も威厳が保たれ、紅白もそれなりに賞取りと運動しつつ、歌い納めの役割を果たしていた時代でした。涙ながらの名シーンや生放送ゆえの迷シーンはいくつもありましたが、私の記憶の中では、昭和45(1970)年の紅白で不死鳥をイメージした白い衣装をまとい、両手を大きく広げて『愛は不死鳥』(詞・川内康範、曲・平尾昌晃)を絶唱した布施明の姿は名シーンの一つです。

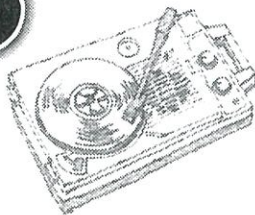
昭和45年という年の大衆音楽界は、すでにブームが去ったGSと吉田拓

郎を中心とするフォークブーム勃発との端境期にあたり、南沙織、小柳ルミ子、天地真理らの女性アイドル

## 名曲カルテ

# 昭和歌謡と いまでも

堀井六郎  
絵・松本浦



やフォーク系グループの大挙出現を待つ地殻変動の時期でもありました。私の脳裏には、藤圭子『圭子の夢は夜ひらく』(この年第1回日本歌謡大賞受賞)と、クールファイブの『逢わずに愛して』と『噂の女』が深く刻印されている年でしたが、この年の紅白は美空ひばりと宮田輝が司会を担当。

初出場のちあきなおみ『四つのお願い』や和田アキ子『笑って許して』らヒット曲の多い紅組に圧倒されていた白組でしたが、後半戦の勝負どころで布施が登場、23歳の若さをおつけた歌唱を印象付けました。レコード大賞は『今日でお別れ』の菅原洋一が受賞し、紅白ではトリ

の前の前で登場しています。トリは森進一(『銀座の女』)と美空ひばり(『人生将棋』)が歌い、どうでもいいことですが、優勝はやはり紅組でした。

『愛は不死鳥』の歌詞は「永遠の生」という川内康範の死生観が描かれたものですが、次第に盛り上がっていく平尾メロディーとともに絶唱度を増していく布施の劇的歌唱、どれも皆、すばらしいものでした。

デビュー当時の喉を絞めて歌い上げる布施の絶叫スタイルは『霧の摩周湖』から『愛は不死鳥』へと歌い継がれましたが、実はこの曲より4か月前に発売された『ときめき』で、布施は究極の絶叫歌唱を披露しています。おそらくもうこうした歌い方はしないし、年齢的にもむずかしいだろうと思わせるほどの布施の絶叫度は、矢吹健をも超えています。

『ときめき』は『翼をください』のコンビ(詞・山上路夫、曲・村井邦彦)による作品ですが、歌詞にちりばめられた「闇、いのち、荒海、死」といった言葉は、山上の朋友・石坂まさ(『圭子の夢は夜ひらく』作詞者)や川内康範(『逢わずに愛して』作詞者)が一部乗り移ったような感もあって、興味深いものがあります。